

第2回全国城跡等石垣整備調査研究会が開かれる

2005年1月20～22日の3日間、佐賀県立名護屋城博物館で第2回全国城跡等石垣整備調査研究会が開催されました。

初日は北垣聰一郎氏が「石垣の伝統的技法とその修理について」をテーマに基調講演をされました。これは、文化財石垣の修復ではいつでも議論となる、石を積むための伝統技法についての内容でした。“いつでも議論になる”のは、伝統技法とは簡単に言うけれども、ではいったいそれはどんな技法なのか、そしてどのように積めばその石垣の文化財的価値を守れるのかという問題が不可避だからです。

北垣氏の言われる、いわゆる「穴太積み」に関しては、発掘調査に携わる人たちから厳しい批判を受けることもありましたが、多くの事例を観察されてきた経験は各地で行われている修理事業などで頼りにされているのも事実です。今回の話ではそうした経験に基づいた話というよりは、石積み技術について書かれた文献を通じて近世城郭の石垣を眺めるといふ、従来北垣氏が主張してきたものでした。

二日目は九州で調査された城郭遺跡における石垣の事例について報告がありました。まずは小倉城と中津城、名護屋城での調査事例が続けて報告されました（初日に玄界灘から吹きつける寒風の中、名護屋城の調査現場の見学がありました）。比較的規模の大きな発掘調査であったため、石垣構築の时期的な相違などがわかってきた事例です。北部九州における近世城郭史を眺める上でも貴重な調査事例といえそうです。

そして次に、石垣修理工事における実際の工事の進め方について、発注者側と受託者側からそれぞれ話がありました。

一般的に、土木の分野では細かな決まりごとによって構造物の基本となるものが決められています。それは見方を変えれば、その決まりどおりにやっていたら目的の構造物は造れるシステムになっているということです。そもそも、石垣修理工事も土木工事の範疇に入りますが、そうした一般的な土木工事のシステムでは工事ができないところに、発注者、受託者双方が大きな苦悩を抱えることとなります。こうした苦悩や問題点について、それぞれの立場から報告がありました。参加者の多くがそれぞれの現場でそうした問題を抱えて試行錯誤を繰り返しながら仕事をしています。多く参加者の関心は、この点にあったことと想像されます。



二日目：討論の様子

こうした大きな研究会では、その地元で実施されている調査現場などの見学会が、シンポや各報告に組み込まれて企画されることが少なくありません。一観光客となって当地を訪れてみてもなかなかお目にかかることができない場所だったり、担当者の“生の声”が聞けるので（この“声”というか“叫び”が正式な報告書に示されるとは限らない）、現地見学に参加するだけでも少なからず収穫があったりします。

今回の研究会では、初日に名護屋城の調査現場の見学がありました。右上の写真は三ノ丸で出土した石垣の隅角部です。当城では現在の石垣の内側から石垣が出土することが本丸などで確認されています。算木積になっていません。

右中の2枚は「前田利家陣跡」の現場で、三日目に見学しました。上が前田陣の館があった正面の石垣を見たところです。この写真ではわかりませんが、大きな石を用いて積み、規模の大きな枡形を通って陣内に入ります。後方の山上にも曲輪群が広がっているようで、一万石クラスの大名城のほうがいかに小さいかもしれません。下は陣内に残された旗竿石で、どこの陣にもこうした石があったのでしょう。

一番下の写真は、獅子城跡（唐津市）に残る長大な石垣です。写真に見える平場が「調馬場」と呼ばれ、石垣の上が「一の曲輪」です。この写真でも、石垣に孕みが確認できます。深い谷をせき止めるように石垣を築き、盛土して「一の曲輪」を造成しています。「調馬場」と「一の曲輪」にはあまり立ち入らないほうが無難そうです。狭い山上でまとまった面積の平場を確保しようとするので、こうなってしまうのでしょうか。一見の価値ある城跡でしょう。「三の丸」下まで車道がついているので、比較的楽に登れる山城です。



佐賀県立名護屋城博物館の方々に大変お世話になりました。

